紀　　要

第 7 号

目　　次

二つの前方後円墳 ……(細川修平)… 1
滋賀県出土の埴輪資料集(その4) ……(稲垣正宏)… 27
近江へのアプローチ・その1 …… 43
　1．高島郡の地形と条里 ……(神保忠宏)… 44
　2．高島郡における遺跡の動態　―今津町周辺をフィールドに― …(畑中英二)… 50
　3．高島郡の古代寺院 ……(重岡　卓)… 57
　4．高島郡の鉄生産とその周辺 ……(大道和人)… 61
　5．高島郡の古代北陸道 ……(内田保之)… 66
　6．高島郡にみる古代国家 ……(細川修平)… 71
南北方位建物についての研究ノート ……(田井中洋介)… 77
近江京域論の再検討・予察―7世紀における近江南部地域の諸相― …(相原嘉之)… 83
滋賀県における古代の土器様相・その1
　―湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に― ……(畑中英二)…104
江州農具雑想ノート ……(上垣幸徳)…126
滋賀県甲賀郡土山町における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布
　―土山町石造美術石材分布調査概要― ……(兼康保明)…131
滋賀県内出土漆製品集成―後編― ……(中川正人)…145

1994．3

財団法人滋賀県文化財保護協会

江州農具雑想ノート

上 垣 幸 徳

I

弥生時代に農耕文化が我が国にもたらされて以来、日本人は農具を作り使い続けてきた。時代を経るに従い、農具の材料も当時たやすく手に入れることができたであろう木からそれに鉄製の刃先を付けるもの、身が金属、柄が木製のものに変わり、現在では金属の塊（つまり農耕用機械）で田や畑を耕したり、刈り採りをしたりしている。

このような農具の歴史の中で一つ滋賀県と深い関わりを示す名をもった農具が存在する。それは「江州鋤」と呼ばれる鋤の一種で、文献では江戸時代に出版された『農具便利論』(1)という農業書の中にでて来るのが最古例である。普通の鋤は真っ直ぐの棒状の柄が身に対して水平に取り付いているのに対して江州鋤は湾曲した柄が身の上に取り付くのが最大の相違点である。『農具便利論』によると、江州鋤は田の中や溝の中に溜った砂をすくい取る道具であるとし、この文献が表された当時他の地方ではこのような形態の鋤はなく、極めて便利な道具であるとしている。

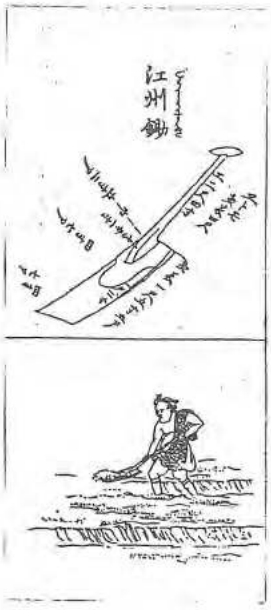

図1　江州鋤
（『農具便利論』より）

鋤のもともとの機能は地面に垂直につき立て土を起こしていくことである。そこから派生して、例えば「北野天神縁起絵巻」(2)に見られるような掘削作業にも用いられている。いわば現在の「ショベル」(3)のような役割を担っていると言える。ところが、江州鋤では形態上穴を掘ると言った垂直方向の掘削作業には向いておらず（水平方向にはちゃんと掘削できる）、『農具便利論』の記述を重視するならば、むしろ「スコップ」と同等の機能を発揮させるために作られた農具であると考えられる。

おそらく、この江州鋤は備中鋤といったような局地的に出現したものが普及した江戸時代に当時の農業書によって全国的に知られるようになったものと考えられるが、『農具便利論』に掲載されている絵図を検討するかぎり、その頃には現在見られるような形態が成立しているようである。つい最近まで使われていた江州鋤も形態的には江戸時代のものとはさほど変わりはない。

ではこの局地的に出現した農具の一つである江州鋤の出自をどこに求めるのか、また出現の背景はどのようなものであるのか。

II

元来鋤(4)には2種類あって、刃の部分から柄の端部まで一本の木で作られる一木鋤と身の部分

と柄の部分を別々に作る鋤があった。結局後世にまで生き残るのは全体の強度に優る一木鋤であったようで、弥生時代中期中葉以降に出土する鋤の大半は一木鋤である。

はじめの頃の一木鋤は柄と身の連結部分は水平のものばかりであった。日本国中近世に至るまでその形のものは使われていた。ところが古墳時代になると身に屈折して柄が付く屈折鋤が出現し、両者の量はほぼ同じくらいになる。この事実についての評価は難しいものがあるが、筆者自身は当時の鋤が掘削用具としての機能、つまり現代の「ショベル」と同じ機能と土をすくいあげる機能、現代の「スコップ」と同じ機能とに分化していったことがこの時期に起こったのがこの現象の原因の一つであると考えている。

少々時代は跳ぶが、近江では平安時代に入ると少々形態の変わった鋤が出現する。草津市中畑遺跡で出土したものを例に挙げると、身と柄の連結部分を上から見ると矩形に作り出し、上面は水平であるが、下面は水平に連結するのではなく、角度を持って連結する。鋤先は金属製のものが付くようである。

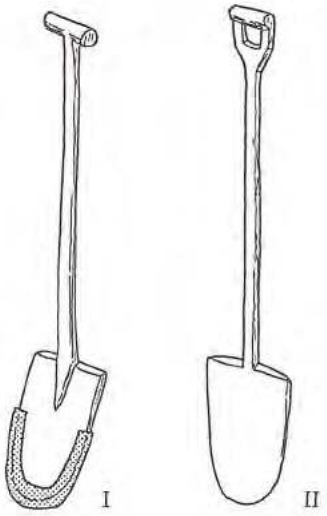

図2　古墳時代における一木鋤の二種
I．屈曲鋤　II．直伸鋤

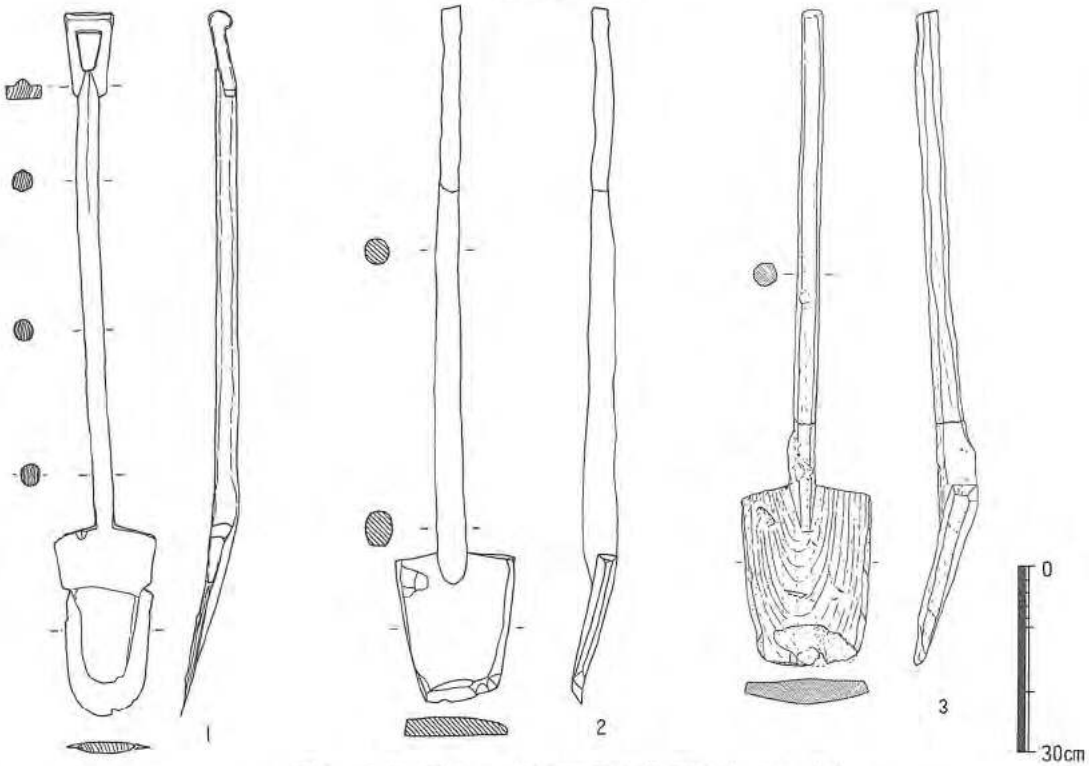

図3　古代～中世における一木鋤（番号は表1と共通）
1．草津市中畑遺跡出土　2．野洲町三堂遺跡出土　3．能登川町今安楽寺遺跡出土

中世にいたると出土例は少ないものの明確に古代の鋤である中畑遺跡のような例から発展したと考えられるものが出現する。13世紀代では野洲町三堂遺跡[5]、15世紀代では能登川町今安楽寺遺跡[6]で出土例がある。いずれも身の端部に柄が鈍角の角度を持って連結する。三堂遺跡出土例は柄の断面が連結部にいたっても円形に近い形である。今安楽寺遺跡出土例は連結部が矩形で柄の断面も八角形である。このことを除けばこの2例は形態が酷似するものである。どちらの例も金属製の鋤先は見つかってはいないが、三堂遺跡出土例は先端部に黒ずんでいる部分があり、そこに鋤先が付いていた可能性がある。

また、この時代には組合せ鋤も使用されていたらしく、近畿地方各地で柄や身の部品の出土がみられる。滋賀県でも草津市下寺観音寺遺跡[7]で柄の部品として想定される木器が出土している。

先の2例以降に続く時代の出土例は残念ながら確認されてはおらず、直接的に「江州鋤」との関連を確認することはできない。

III

江州鋤の機能についてもう一度『農具便利論』を見てみることにしよう。前述のとおり、その著者は江州鋤について「少しくゞみあり畔底の土をすくうには」大変便利であると述べており、鋤に関する他の記述からも鋤の主な機能として土を掘るのではなく、土をすくいあげることに重きを置いている。図. 1に挙げた絵図のようにその使用の際には自分の方から前に向かって突き出すよう鋤を動かさなければならない。このうような動きは佐原真氏が指摘した日本の農工具の使用法[8]、つまり日本の道具は「引く」という動作で使われているという見方からは全くの正反対の動きである。これより考えると、この江州鋤は「土をすくいとる」とうい作業のための特殊な農具であると考えるのが良いようである。

古墳時代中期以降の機能分化から考えると、土をすくいあげる機能を発揮するのは直伸鋤のほうであり、屈曲鋤は掘削用具としての機能が主たるものと考える。そうすると、中世に属する時期を与えられる前の2例の鋤は、まさに「踏鋤」と呼ばれ「北野天神縁起絵巻」に登場するような掘削用具としての鋤であると思われる。このような形態からみてとれる機能の面からは江州鋤と出土遺物としての鋤からは連続性は追及できなくなってしまう。しかしながら、江州鋤は柄と身の結合部は屈曲しており、各部分で比べるならばその形態は良く似ているとしか言いようがない。

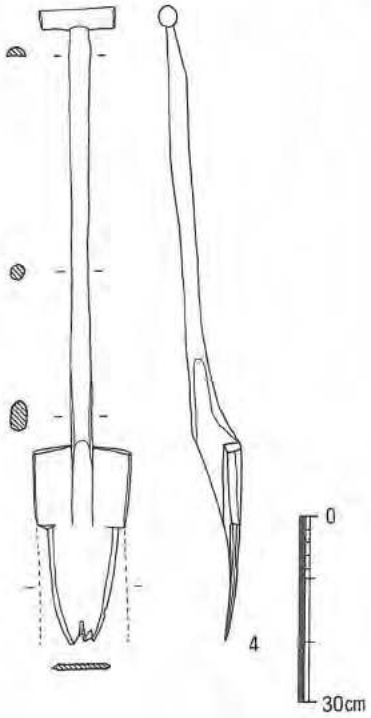

図4　現代の江州鋤（番号は表1と共通）

Ⅳ

では、江州鋤と中世の鋤との形態的な違いはどこにあるのであろう。そこで注目されるのは柄と身の結合部分の角度である。

中畑遺跡出土例は特殊な形をしているが、柄の裏の部分で測る上付と約16度の傾斜で身に取り付いている。同じく、中世の鋤の2例は約15～25度で身に付いている。ところが、江州鋤の場合は柄が湾曲しているので必ずしも同一視で比較はできないのではあるが、図. 4で示した中主町採集のものの場合、柄の端部と結合部分を結んだ線の角度は前の例に比べて傾斜が緩くなっているのに気がつく。当然柄の中軸で角度を測ればもっと傾斜は緩くなるはずである。

前述したとおり、柄と身の角度には機能の違いが反映されていることから、江州鋤は掘削用具としてよりも土をすくいあげる機能により傾いて作り出されているといえる。加えて中世の屈曲鋤と形態の類似を認めるならば、本来直伸鋤から機能分化して掘削用具として派生した踏鋤がいわゆる「先祖返り」を起こして土をすくう機能を中心に発揮するように特殊化していったものと考えられなくもなさそうである。

Ⅴ

このような江州鋤の誕生の背景はいかなるものであったのであろうか。ここでは一つの可能性を提示してみたい。

金田章裕氏の研究[10]によると琵琶湖の沿岸部においては中世以降も河川の堆積作用等によって汀線の変化があると指摘している。過去に残された絵図と現在の地形を比較してみると中世当時にあったと想定される汀線は現在よりも内陸部にあることがわかる。また、場所によっては汀線の後退も認められる。

ところで、一方では中世成立期に農地の開発がピークに達していることも知られている。そこから推察すると、自然の堆積作用による土砂の流入は、土地が増えるといったような歓迎されるべき一面があったにせよ、そのことよりもむしろ新たに開発した農地の維持の面からすると非常にやっかいな問題であったであろう。現在よりも悪かった治水の事情では、水が用水路からあふれ出る度に辺り一面に大量の土砂が撒き散らされたであろうし、毎年用水路の中に土砂が溜って

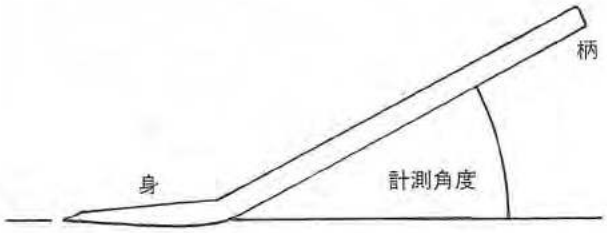

図5　角度計測法模式図

	遺　跡　名	角度
1	草津市中畑	16°
2	野洲町三堂	15°
3	能登川町今安楽寺	25°
4	中主町現代江州鋤	12°

表1　角度測定表

さらえる必要が障じたはずである。そのような状況で溜った土を用水路や田畑の中からすくいだす道具の需要が著しく高まったであろうことは容易に想像できる。そこで中世までは農地の開発によって掘削の機能が重視された鋤が前に述べた状況により適合するように柄を湾曲させその形態を変化させていったのではなかろうか。つまり、江州鋤は琵琶湖とそこに流入する河川によって形成された土地で農業を行う近江で生み出されるべくして生み出された農具なのである。

Ⅵ

今回取り上げた問題点についてこの文で十分な答えがでたとは思わない。鋤についての資料をもっと探求することに加え、別の視点、例えば他の農具の変遷などにも注目してみる必要がありそうである。おそらく、削滅していく運命にある江州鋤を通じて今後も近江の農業史を考えてみようと思う次第である。

文末ながらこの一文をまとめるにあたり、大橋信弥、造酒豊、平井美典、石橋正嗣、山本一博の各氏に御教示、資料の提供、また、図版の作成には山岸賢一氏の協力を得たことを記して感謝いたします。

註

(1) 大蔵永常『農具便利論』 1822年

(2) 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究編「北野天神縁起」(『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻p．191 平凡社 1984年)

(3) 土木用語では、「ショベル」は掘削用具として、また、「スコップ」は掘削した土をすくい集める道具として定義されているのでそれに従った。

(4) ここでは唐鋤等の牛耕・馬耕の際に使用する鋤は省いている。

(5) 滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース第135号』 1993年

(6) 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第5集 今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会 1986年

(7) 『昭和51年度 滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1978年

(8) 佐原真・田中琢『考古学の散歩道』 岩波書店 1993年

(9) 測定方法については図．5のとおり。ただし、現代の豪江鋤については柄の端部と身の端部を結んだ線で測定した。これ以降「角度」とした場合図．5で示した箇所の角度のことを指す。

(10) 金田章裕『微地形と中世村落』p．11～32 吉川弘文館 1993年

参考文献

上原真人「農具の変遷－鍬と鋤」(『季刊考古学』第37号 雄山閣出版 1991年)

奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』 1985年

編集後記

今年度は雨が多く冷夏であり、どの現場もいたずらに排水作業を繰り返し時間に追われて苦悩の日々を過されたことと思います。本紀要も、第7号を迎え、本号には予想を越える14編の論考を掲載することが出来ました。調査に追われながらも、日頃の各自の問題意識と研鑽の結果であるといえるでしょう。本号が「近江」や「文化財」への理解の一助となり、読者の方々からの御指導、御鞭撻が賜れれば幸いです。

5701 K
滋賀県文化財保護協会蔵書
256

平成6年3月

紀　要　第7号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印　　刷　宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241